



椿説弓張月  
五藏 貞

^ 13  
2945  
26









神仙の引接及びて更おこの姑巴島おまきり。巴麻を破魔めて  
悪魔破るの義お稱ひ姑巴を盡破めて盡妖破るの義お直  
る大日本めて童子ホが春のしめりお弄ぶ雀小弓を破魔と名  
づく。舜天丸が弓箭を造りて神とし祀るもあれよ。是れ  
名詮自性といらん。故かれむつが父破魔と盡破との二の語あり。  
再び起りて驟雲討めり。再戦の勝利疑ひるし。只林太夫の  
久し。今茲いとく母在せしと。理を述く。凍めり。は為朝を  
とし。紀平治林太夫おい。是れよ。聰明睿智お感服して。志を  
嘆賞あつり。王女を子子の伶俐さ。是れおあり。は娛と  
のま。袂におく。雲の涙坐お拭ひ。あく。とげ。あや。尺蠖の伸んと  
は。お。志を。し。その。身を。屈。と。し。く。を。力。を。養。ひ。時。を。ま。先。よく

その身を屈して敵の不意お伸も。軍威竹を裂か如けん。さ  
は。と。や。と。宮。お。為。朝。い。疑。ひ。を。決。して。遂。お。謀。を。定。め。林。太。夫  
を。潜。中。り。佳。奇。呂。麻。か。つ。れ。と。仰。ご。も。林。太。夫。の。今。ま  
お。推。辞。を。お。せ。り。あ。は。れ。も。あ。は。れ。も。別。道。を。お。し。り。り  
いと。本。意。お。し。か。ら。べ。し。と。お。り。ひ。う。け。ね。と。糧。米。も。駁。齋。し。且  
按。司。王。女。お。進。ん。で。せん。と。と。嶋。織。の。衣。な。と。も。り。て。身。を。り。又。船。次  
巖。か。へ。乗。り。て。破。損。せん。と。の。為。お。斧。鋸。鑿。釘。を。准。依  
あ。て。の。お。え。れ。ば。の。嶋。お。羅。漢。杉。の。大。木。多。り。嶋。の。習。俗。な。れ。を。  
某。も。船。造。る。の。を。と。く。え。な。れ。て。お。お。い。と。お。田。ら。ば。春。ま。う。に。  
輒。く。軍。船。一。艘。を。造。り。出。し。の。へ。し。ま。げ。て。田。め。り。ひ。種。と。い。と。叮。嚀  
お。希。へ。の。主。後。と。な。す。の。志。の。涉。る。を。稱。嘖。と。さ。て。為。朝。の。宣。ふ

中嶋長をさしめ申す。さしては妻子の公苦し。あはれなれども  
 その妻子は苦しめて。あはれの別よ。あはれや。毎日申磯辺申し申出で  
 長がゆるを待たせ。あはれとく佳奇呂麻へ立入る。人のさうを安  
 せよ。この嶋の仙桃あり。桃をりて。糧とせ。米穀も欲し。かたは。これ  
 好意を他よせ。とどく。衣をば。とて。冬の料。宛る。と  
 仰す。さあ。お賺し。しら。多入。紀平治も。又。某西國。人と  
 あり。て。め。よく。と。あ。糸。造。る。を。あ。既。斧。あり。鋸。あり。  
 長が。手。と。借。り。及。び。八町。礫。が。老。の。ま。ま。び。よ。船。の。輒。造。る  
 ぶ。あ。う。ば。う。や。暎。雲。が。賊。軍。こ。に。よ。せ。す。あ。の。も。進。退。さ。べ。ら。  
 自在。あり。か。く。て。春。の。比。及。よ。林。太。夫。が。お。ん。迎。ふ。あ。の。と。も。往。還  
 ち。ち。ま。う。せ。さ。る。べ。し。と。い。ふ。あ。の。あ。う。く。飲。び。て。紀。平。治。が。船。を。造。る。

これ又翼の如く。林太夫と。申す。舊の嶋へ入りて。春も  
 二月のまじり申す。至る。と。い。ひ。て。縁。由。を。告。げ。嶋。人。お。か。か。り。ひ。潜  
 小兵。糧。次。船。よ。積。む。泊。の。西。濱。小。漕。は。し。為。朝。が。宜。野。濱。浦。添  
 次。攻。め。し。申。す。速。ふ。未。會。せ。よ。と。仰。す。林。を。ま。の。や。う。く。よ。美  
 しく。さ。あ。も。か。く。ふ。も。君。の。お。ん。為。に。い。む。と。回。答。し。つ。次。の。日。船。底  
 申す。り。て。嶋。衣。斧。鋸。を。と。り。紀。平。治。よ。通。ふ。し。申。す。り。大。洋。よ  
 申す。て。佳。奇。呂。麻。へ。か。り。け。り。と。の。下。申。す。し。却。説。為。朝。王。女。の。姑  
 巴。島。よ。留。り。て。舜。天。丸。紀。平。治。と。と。も。に。暎。雲。を。軸。破。る。計。策。を  
 張。し。あ。ふ。行。ふ。今。茲。も。既。に。暮。ら。ん。と。い。ふ。さ。あ。も。紀。平。治。の。齡。は。さ。う  
 ぬ。と。い。ふ。も。仙。境。よ。年。月。を。経。た。れ。ば。あ。や。氣。力。壯。年。の。と。れ。よ。り  
 健。よ。う。あ。て。日。中。に。一。艘。の。独。木。船。を。造。り。申。す。り。枯。も。と。く。

大坂の舟

紀平治舟



姑巴嶋こへま  
 紀平治きへいぢ  
 独木船ひとりふね  
 造つく

春風号長月合遺書下夫木之



本説日別月抄遺書下夫木之

草壁の色の更ふ焼しづれを見て春のまづるやおがえの朝夫婦  
この荒磯へ来りてその日より僕れはや百日に及り今ハ時  
節到来しつやう潜びて中山へ赴れり王子の所在を索す経て事り  
首里の形勢をもよく窺ひて時宜ふよらば好くび宜野湾浦派  
の城を攻とるべし林大夫の謀を説示しこれ兵糧と西濱あり  
るん為朝婦とび旗を揚とりとやえん松壽鶴龜ホのぐさ  
り存命てごふあふん兵士の招として馳とるべしとて主後四人  
既お軍議と決しおのく林をまが進びしれ嶋衣衣被く硫黄  
商人の打扮又之社の神ふ奇ひ記し之條の征矢を竹の節を  
ぬきてその内へ籠その餘舜天丸の神仙より獲りひる源家相  
傳の兵書と金の短冊とんどの木の皮の纏い果ててとる松底小

隠し入れおひしる日次吉日として主後件の船小乗り遠く覽と解  
行ぬ紀平治の楫を操り水行の熟して漕ぐ船の春の珠さう浪靜  
あて嶋山遠くええれば残る人のあふ縁をも年来日事伝  
るれ名残もさらし惜まらう浮世をまのぶ旅なれば那覇と泊の  
湊へよらば北へくと漕きまじあつて愁眉を閉くされ運天山派  
目的あて名護と羽地の間なる大栄河小乗入れたり凡この処まじ  
の海上百里ふもあふれへたよまきのみの曉ぬ姑巴嶋と出くけつと  
たや日のうちらに輒く着岸あつる人の入力の及ふ所とあつと加旃  
山を運天といひ河を大栄といふその名おおいていと愛しし日  
南よ名護嶽あり西北よ今帰仁あり君子名立る民今帰仁  
これも亦つが君の武運をひらうれば前象ありとて紀平治

春前う長月合員



只顧ふ祝しちも我も與われが。みる美壺もぞ入りのむか。かく  
 弘を大栄河に乗捨て各行李と背負ひ。行囊火項をば  
 名護と佳楚との山間より恩納嶽のかへ赴たるも。主従  
 四人おほし道を。りちもに走りの人小あやし。わらうことこまや  
 として為朝の舜天丸をおて二里あまり先より。王女の紀平治  
 おて遙中後れて。あまも。り宿借ら。その簷下。識を出し  
 おくを。と豫て示し。あし。人多。う。山路のみと踰つ。竟  
 人煙を。んざりし。か。う。く。後。を。れ。ら。して。その夜を恩  
 納嶽の。の。露宿し。明。亦路を。そ。した。ふ。に  
 王女と。小の山。を。し。整りて。查國寺。環會。又毛國興  
 新垣亦が忠魂小償せ。れ。を。く。危窮を脱。し。も。今。八。年

の夢の跡。これの。覺。その人の。面影。亦幻。も。る。は。終  
 かく。果敢。これより。路を。東南。より。越。来。の。間。切。り。り  
 あり。の。彼。真。跡。と。え。くれ。を。名。の。を。朽。れ。石。橋。中  
 涙。や。凝。く。苔。の。糸。散。や。か。この。恋。を。て。路。の。人。を。立。在。の。火  
 人。を。あ。ら。れ。と。紀。平。治。を。扶。掖。れて。中。城。の。東。の。姑。塚  
 の。山。里。小。の。日。と。西。山。は。傾。き。り。定。よ。の。廉。夫。人。の。の。り  
 中。伏。あり。む。し。の。油。樹。も。母。の。形。見。と。身。を。絞。る。袖。の。を  
 露。け。て。お。さ。じ。歎。きの。ね。や。誰。建。て。より。ま。さ。遠。く。ね。  
 空。卒。都。婆。次。へ。て。も。ら。ら。か。さ。しく。外。の。功。徳。を。あ。め。て。志。げ  
 念。じて。伏。拜。を。去。人。として。い。く。そ。と。び。亦。ち。を。成。の。樹。下。産  
 目。家。の。闇。と。夕。こ。えて。孰。く。人。や。鳴。く。山。鳥。と。共。の。時。を。り。と。め

あまのひね

第六十回

燭を秉て山妻客と笛ひ  
劍を借る樵夫婦の俟

さるはる母為朝と舜天丸をいそげして山下好くまけ入るあふ  
その日も既小暮果て人影罕なれ谷蔭よよ一軒の白屋  
ありけり色々の稚鳥風戦ぐ蔓又より細き燈火の幽よりりて  
んえしうば斤折戸ふまよりてまん密中り小窓窺ひくむ年紀ハ  
三十のまりの母して山ふところありいと似げなれ顔さ八九分の  
あれと天目一の命の炊妻あや偏目盲くれ賤婦が芭蕉布  
織てわろりさる。爐小焚さるるれふ。柴の生樹の煙いせげや  
霧の中なれえくとおやし。昔とあのみ面影ハ由緒おれため

雪落と。津の宿ふ世とや避らん。かどりの外は宿りを借とも  
身の仇とされるゆへあふ。おひひくやと耳語る人ハ舜天丸も  
それや。幽窺昨夕一夜さ露宿して目睡ともなくあじこれ  
母君さるる疲勞なまらぬ。鄰家どもなれ孤館とさるく小憚る  
かこもゆらごと。今宵とあいにありまへし。と回答あふ。まんさて  
半崩とかくし斤折戸を推とらえて為朝やがてすこ入る。これ  
山路も暮れし。これ旅客なり。この夜をのくしとびてんや。  
と親子りうとも呼門あへ。彼賤婦ハえかくりつ。忽地機  
手とぞ。え。善端にかうふ松の同色根ふ。ま。く。ま。う。り。か。あ。  
とえて音はる。友さふあふ。孤館も。緑。あ。れ。バ。こ。そ。踏。ゆ。  
人の宿りを乞なふ。あ。じ。ハ。出。て。家。ハ。あ。ら。ほ。と。山。下。な。ら。ね。

馬路は遠し。そまふごとく雨のまらなり。月も漏れど透間の風を  
御ぶべれよとごも侍らば夜の合衣と夫婦の外は被げすなりと  
料のなけれど。これをも厭ひあらど宿りもひれと嘆ひ入る  
歎待ぶりに親子の野路の驟雨も立好くりられを待つて。その  
言らるるまてまでもあらば。卧房さふ貸あり。頃日の暖と合衣さ  
と欲うとご女子さ人侍ひとれが。此一後とれど今こそや追著  
らぬ。ゆしと人としひうけて。為朝の脱とるまよ斤折戸は結びさけ  
は。王女紀平治が目標とし親子ひとしく。竹簀子に尻とかけ  
草鞋の紐を解る人へ賤婦を藤蔓の蔭せし桶中水と汲入れ  
る。為朝舜天丸も足を履がし。掃ハ稜の逆毛と破と席次  
かた拂ひつ。とるまよと誘引が。やとららぬがれる朝の後方は跟

舜天丸も地元のほとりふけを占め人へ。海螺も竹を押曲る。  
土籠めれとれ湯もうれほど母沸かす体をも。木挽の碗と級と  
なるとべてはし。物せが受りちて。親子左右にえくたすつあふ。壁  
おちて骨とあらし。柱と朽て皮とさびれ。猫夫の家々とおりま。  
獣皮もはし。り山賊の隠宅もや。とさとごまを放し。かきつて。いふ  
こともなく。ゆとれを賤婦につくぐとて。客人とちん。何國より。  
何処へとて。旅をがあら。とらぬ身なれぬ。物のいひさすなり  
といふ。為朝はつがう人な。睡らぬ。ゆと。いと使す。い。おひ  
おがら。まきまき。ゆと。えせまら。ゆと。吾門に於て。乃。萬  
なる硫黄商人とらる。幸かた。るの。こ。おほ。れ。都。會。の。地。格。か  
小生活のよとごもめくぐ。思ひて。此度。妻子。さ。人。お。て。の。ち。り。す。つ。あ。ふ

あららるるも又浪風静るるに間切毎に新園を居る。秘の  
往還を許されどとせえしう。山南首の知已にさし  
せんとしてかくのどく山路よりて迷ひ尋つ。今宵の宿りは一  
千金好意と心るべう。さてもあはれの生業のゆるむを  
らんゆゑにあらうにあらわて後へ再び訪て些むりの報ひす  
ぞくおりのなり。名告志し人しと寢る。賤婦をたらけ  
え。笑ふ。日光も疎き山中の生涯をおくる。夫と  
毎日小薪を推り。まらへを芭蕉布と織り。これを里より  
出て露の命と繋ぐの。名告るべし。秘の後の報ひも  
願ふ。つに現定りなれ。世のつとむひなり。天孫氏の御裔  
亡びまし。大里の按司が朝ね。はしる軍兵を起し。

嶋袋めて猛火は焼く。王女もその日暮れぬ。とせえし。小灰の  
中へ骨を残さざれ。朝夫婦虚死して脱去する。なるとく。  
驟雲法王の安くと安くと安くと。彼此小関と居旅客なら宿  
貸る。許し。秘の彼を捕捕とも。秘のとも  
あて首里へ。按司は。官職願ひ。かごとと  
まらる。生涯坐つ。食ふ。余の金銭を。あつて  
残る。隈も。せえ。と。浮世。遠き山。住む。この檄  
文。めれ。と。夫を。里へ。と。都の風声。も。つ  
に。後の。祟。を。怕。れ。後。の。善。報。を。受。ん。と。客。人。と。し。と。雨。を  
と。都。人。を。慾。多。く。情。薄。し。と。せ。え。し。と。形。を。か。く。鄙。ひ  
と。れ。と。良。人。の。俠。氣。あり。物。の。情。を。な。れ。今。も。あ。れ。ゆ。

身のとも。腹まきこなりく。追ひも。おぼし。公安く。体ひ多と。信やう。  
 し。慰れ。が。為。朝。の。舜。天。九。と。め。と。あ。は。し。り。と。う。と。う。と。う。と。う。  
 おか。れ。と。外。く。し。く。その。好。意。を。致。ひ。せ。え。只。江。湖。上。の。お。が。り。ゆ。ひ。  
 紛。ら。し。と。せ。ゆ。と。れ。が。賤。婦。の。為。朝。の。腰。刀。に。目。と。か。け。つ。端。ち。う。と。う。と。  
 月。影。を。つ。く。ぐ。と。ら。ち。瞻。め。常。あ。の。あ。ぬ。あ。は。し。の。遅。さ。よ。近。属。の。盗。  
 賊。知。く。に。ひ。と。だ。し。と。都。の。と。と。と。静。る。ら。は。と。や。く。り。の。と。あ。る。る。  
 の。夫。な。り。と。ひ。と。り。ご。ら。は。け。え。え。り。て。客。人。と。せ。し。留。さ。し。て。と。と。檜。阪。  
 ち。て。一。走。り。い。ゆ。れ。て。え。ん。と。い。ひ。り。て。熟。山。と。て。只。ひ。と。り。月。と。燭。お。  
 走。去。り。舜。天。九。を。賤。婦。が。背。影。を。目。送。り。く。父。君。い。く。も。あ。は。し。と。  
 や。ん。孤。目。婦。が。歎。待。能。あ。ま。り。に。信。や。な。れ。も。ち。う。と。う。と。う。と。う。と。  
 彼。ら。を。猜。たり。え。ん。お。ん。佩。刀。よ。め。と。か。け。て。猛。は。外。面。へ。出。去。り。し。

と。夫。小。縛。の。結。を。告。あ。し。誓。も。と。と。せん。為。な。れ。し。願。み。こ。う。い。  
 山。賊。の。棲。や。り。は。も。喙。雲。が。察。事。卒。の。網。羅。を。張。つ。俟。ち。や。あ。い。ん。  
 荊。路。を。走。り。が。う。朽。梁。を。う。ら。れ。へ。く。山。中。を。世。を。惜。ま。は。し。と。  
 り。あ。も。ら。も。又。久。恋。の。家。母。あ。ら。は。這。奴。ホ。か。け。り。事。ね。間。由。い。や。  
 去。ま。ま。い。し。と。声。密。中。り。小。室。へ。は。乃。朝。や。て。う。ら。点。既。これ。も。あ。ら。  
 る。あ。ら。り。され。ば。と。て。王。女。紀。平。治。ホ。る。は。塗。あ。あり。これ。ら。も。告。  
 して。親。子。處。く。脱。去。る。も。あ。は。し。夫。婦。が。害。心。あり。支。堂。あり。  
 て。それ。を。追。ひ。ゆ。く。され。も。又。敵。地。あり。欲。心。中。耽。り。利。母。聚。あ。山。賊。も。  
 め。れ。喙。雲。の。察。事。卒。も。あ。ら。は。あ。れ。怕。う。と。あ。は。し。怕。う。と。あ。は。し。  
 只。ら。ち。捨。て。お。れ。ま。え。と。懸。く。音。多。も。な。く。回。答。ま。折。ら。ち。勿。心。地。外。  
 面。久。音。して。これ。あり。く。と。い。ふ。声。の。正。は。紀。平。治。あり。し。と。て。舜。天。九。の。



春の月長月合時月... 夫... 之...



越来山の  
孤館  
為朝宿

秋の月長月合時月... 夫... 之...

十一

耳聴く。衝と生く。斤折戸以。こゝより。周れたる人。王女の笠を脱ぎ。躡く。こゝみ入り。多ふ。終る。紀平治。王女の笠。こゝが。笠をうら。つ。亦。朝の目。識。よ。こ。て。出。し。ま。く。れ。を。取。て。足。彼。を。ひ。と。り。折。られ。庇。う。ら。ん。の。け。て。竹。簀。子。母。尻。け。け。ま。ふ。主。の。草。鞋。と。り。ま。か。ふ。それ。へ。舜。天。丸。の。母。君。の。長。途。の。疲。勞。を。勅。了。て。覓。の。水。汲。汲。う。けて。足の。泥。を。濯。く。す。わ。び。小。蓮。う。れ。拂。ひ。て。誘。引。し。ま。へ。紀。平。治。も。引。折。られ。裳。を。お。り。して。團。坐。し。つ。主。後。四。人。々。の。恙。な。れ。を。祝。し。祝。され。て。さて。王。女。の。宣。ふ。中。う。日。の。向。暮。と。さ。る。に。公。の。こ。し。そ。し。て。お。ん。跡。以。慕。ひ。ま。か。り。せ。し。が。公。の。外。小。障。る。の。侍。り。て。し。う。お。れ。侍。り。夕。月。の。影。の。い。と。隈。な。れ。と。世。に。借。ぶ。あ。の。便。う。と。ろ。ふ。賢。く。も。識。の。を。生。し。ま。へ。人。の。同。じ。て。お。ん。宿。り。と。さ。る。と。り。と。や。借。し。侍。り。と。さ。る。

ふ。紀。平。治。の。人。や。せ。く。と。て。信。と。奥。を。と。り。入。れ。つ。膝。を。さ。く。先。を。為。給。よ。ま。う。の。中。う。目。今。こ。う。へ。ま。つ。る。途。あ。て。山。賊。と。も。や。ま。き。大。男。五。七。人。樹。立。の。蔭。に。は。い。か。て。う。ち。相。誘。ふ。を。外。ふ。う。う。ま。て。ひ。ひ。首。尾。を。定。う。り。と。半。の。為。朝。を。生。捕。て。夥。の。賞。銭。を。賜。ふ。ん。と。い。ふ。半。の。こ。ま。あ。ら。う。を。衆。議。一。決。せ。し。れ。が。如。し。この。り。み。次。げ。う。より。大。殿。稚。君。の。う。人。公。り。と。な。り。王。女。は。注。目。し。て。足。を。や。走。り。こ。其。処。より。路。を。横。ま。り。て。推。夫。ど。も。か。よ。い。と。さ。る。葛。の。細。道。を。五。七。町。ま。る。終。ふ。偏。目。盲。と。る。賤。婦。の。あ。ひ。ぬ。件。の。賤。婦。つ。ま。主。後。び。え。く。り。て。旅。客。の。侶。は。後。れ。ま。る。あ。ひ。の。び。や。今。宵。つ。宿。ふ。二。人。の。硫。黄。商。旅。を。前。し。れ。が。一。人。が。羊。の。鈴。と。四。十。の。ま。り。に。し。て。牙。の。長。高。く。又。一。人。の。少。年。小。侍。り。り。公。の。あ。の。あ。は。こ。より。南。へ。四。五。町。ま。り。大。に。中。う。な。れ。槐。樹。の。下。よ。ち。ひ。ま。れ。家。に。

付るが。つらつら宿処あり。とぞして行らるる。忽地懐より。斤木一枚。  
 を落しつ。咄苗んとて拾ひて。一人田土夫婦と記せり。王女を  
 是を以覽して。熟文字のらうを按する。一人を合され。大い田土  
 をあつたれ。バ里なり。大里の夫婦と。八郎按司と。つらつら。まてハ  
 彼を中も。稽して。今宵替も。さうん。為。その支堂。お綱。あつ。それ  
 割符。あやと。おば。あつ。お。御。お。樹。下。あて。うち。相。結。つ。れ。癖。者。亦。も。  
 足。彼。お。お。夥。討。あて。あり。た。れ。う。と。宮。あ。お。り。ひ。あ。り。を。ほ。し。の。を  
 な。れ。ハ。彼。賤。婦。を。追。ひ。さ。つ。へ。て。後。の。患。を。除。ん。と。て。え。之。を。お。や。  
 往。方。と。あ。つ。毛。を。吹。き。疵。を。求。ん。より。や。く。両。君。お。告。す。か。つ。せん。  
 と。源。念。し。と。主。後。只。音。走。り。け。や。う。中。お。ん。宿。り。ふ。う。づ。秘。あ。て。う。  
 といひ。つ。けて。件。の。機。を。ち。り。お。と。声。り。ら。は。じ。と。密。語。の。は。じ。め。り。り

を。受。果。て。舜。天。丸。頓。お。嘆。息。し。父。君。は。し。り。れ。り。今。紀。平。治。の。出。る。  
 と。ら。流。い。よ。疑。ひ。か。れ。り。の。え。ま。げ。て。この。処。を。走。り。出。這。奴。ホ。が。畏。れ。  
 脱。と。多。い。と。危。し。と。諫。多。くと。乃。朝。と。只。魚。改。ま。あ。の。こ。あ。じ。の。婦。が。  
 い。ひ。つ。る。亦。その。夫。の。ゆ。る。と。ん。と。て。御。向。外。面。へ。お。と。れ。る。王。女。  
 紀。平。治。は。脱。と。し。舜。天。丸。を。く。言。語。を。盡。し。て。う。に。あ。つ。ハ。危。  
 と。い。ふ。その。危。れ。を。お。も。れ。も。あ。れ。り。あ。り。と。い。く。と。も。敵。を。え。て。一。歩。退。  
 け。敵。又。一。歩。進。む。り。の。進。退。彼。と。我。あ。る。の。こ。勢。ひ。竟。し。脱。し。  
 かに。天。運。う。に。循。環。せ。ば。彼。矇。雲。を。伏。拂。ひ。く。天。津。日。光。を。民。小。  
 え。せ。る。ん。り。つ。が。武。運。あ。つ。お。竭。な。ば。野。人。山。賊。亦。も。勝。つ。と。ん。勇。力。士。  
 を。先。を。喪。ふ。こと。を。忘。れ。ど。これ。お。の。づ。う。処。分。あり。王。女。舜。天。丸。紀。平。治。  
 ハ。且。く。物。の。蔭。お。隠。れ。よ。婦。が。夫。を。伴。ひ。か。る。と。ま。り。あ。い。あ。じ。と。丈夫。の。





亦とさる四零ハ落よるしうば。孰と相語人よとがもさし。教  
 母敵母あふれて生拘らるるもあふ。何の命死りて怨心  
 雪ん溜るふまじ。と必ひ定めて遂に樹木縁草伏し。越来の  
 山よりけり入て。きのふと暮しけり。日の光も疎に谷隈も  
 春まらぬくハ震より。二月あじなれ大將軍ハ再會し奉ふ  
 飲びこれたまふとさし。と首尾を拵かりていと信や小歎待  
 ども為朝さるにうち解あつた。いづる所さもあつるん。志うハ  
 あれど頼とがさたハ人の心なり。かくまて忠義斌あつるん。  
 なぞや婦母侶れ割符とりて支意を嘆び裏いし。為羽を奪へ  
 といせられし。さるるに。と宣へば。松島一切必ひけし。某妻を  
 取かりハ多し。よ迷ひて志を移さふあふ。に。尙さるるに。いと件の

女子ハ偏目こそ盲され亡妻の影ハ面影に似る。亦あれのこ  
 なるに。必まよいと信やうなれば。志に浮世を去るん。これ水  
 月をよし。亦この山下ある。獨夫亦志気あつるのとかさし。  
 くれ張良が才器なく。彼又蒼海公が勇力なくとも。曝雲が出るを  
 張ひ車さるもに。移り殺さんと。竊に練りし。のれと。君真物ゆ  
 照覽あれ。我を忘れて忽地。威豪ハ著松島。なれ人。とさ  
 多のね。軟と気多を。変て怨とれ。ハ。為羽。呵くと。冷笑。ハ。彼世俗の  
 常言。論より。證據。といふ。とあり。衆皆。およ。と。嘆び。けり。多。人。を。延  
 屏風を搔遣りつ。舜天九紀平治り。うさも。に。王女ハ。前を。出。て。松島  
 小對。ハ。東風。平。按。司。の。隱。宅。さ。も。あ。つ。て。宿。り。し。親。子。主。従。耐。心。を  
 よとめ。ハ。あ。つ。る。糸。さ。も。嚮。高。ハ。足。下。の。支。堂。と。お。ほ。し。れ。野。伏。の。

樹の下にま集合八郎按司と捕捕人と密中ふ高嶺とくうく  
 途めて竊せりかくしんばあが仏をさるふよ似れども八郎按司を  
 自然天地神明の冥助をせぬ嶋袋もく猛火を脱れ夫婦ひら  
 小路をまうて佳奇呂麻人誘ひて船を姑巴島の荒磯よはて  
 生死存亡あるはまうり舜天丸紀平治亦小環會静けは春の  
 日和をすちほく更小兵士と集んとも亦彼此の八重山越越身  
 ちうれ谷川の水元来清たれど濁り足下の底意をある結目多  
 うれ細代戸の藤の素の鮮はしあるともさうりひらにはまうん  
 とりれまぬ多人が紀平治と拾ひて撒をり出でて目ちかく松葉ふ  
 した著つ行燈の火口を推向いりこの撒をまわりや日本琉球  
 異なれども八郎為朝の老堂小八町磔紀平治ありと八年す

竹も及びつらん十年あちた春秋を信む人もかた孤島よあうり  
 又稚君を守育とうらびも大殿お再會とまじすわらし今此國へ  
 推流るかひあれがこそ汝が妻の遺せし撒拾ひ獲て野をある  
 を猪しうれ一人田土夫婦と大里夫婦の又袋縫今宵汝が妻は  
 小らえしものよしを密中ふ支堂お小觸ちりされ割符くるとを  
 樹の下めてらち高嶺の悪棍ホと汝が妻の挙動をおりひあひて  
 これをあれかくても統了あふそやと眼を睜し罵れ舜天丸  
 も扇らりまほし姑巴嶋よありとれより汝が妻は父母の妙なり  
 あてこれをあればいと頼りくおりのうらあふあひ物堂  
 入れ財の身方々の仇かごとて身へ賤しくと山賊とん  
 らも既汝が妻と噂ふ千歳とやん人かうか父のおん佩刀は日人

春説号長月合貴三九下失之



松崎  
月下小  
賊を破る  
○の國説  
次の巻  
又えり

春  
冬  
夏  
秋



才  
言  
記  
録  
三  
十  
一

かけられ。さく支壹を喰つど人よ。敵手擇ぬ舜天丸が本事をえせん。  
と扇投捨刀の鞘もみぬけまへ。八町磔も養子の上小刀乃瑞  
衝まぐ。左右よりさし扶む勢ひ猛れ主後を。とらんかうえは。陶  
松壽も腰お帯られ短刀と取て紀平治も投違し項は伸し身を  
はしても。身おの濡衣を乾ぬぬ。雲の命へ惜く。てまうん後の名を  
惜む。おりひのまりて中うやくに首と擡て歎息し風の音もむ  
あう。お君が凋落もとんされ疑ひまへハ理あり。むとんお仔細も  
小半年婦ごころへよくもあふ縁ど松壽おかし今まうに南の  
海陸とつれらも濁る世の山豪となりて舊主も冠せんや抑  
ろの山中お身と隠しなれらる。あまこも形一日を送り落るおの  
中お竹を白て。まうのゆとまう。おの山下ハ廉夫人の自殺

あふれ姑場もも近く。又亡妻生の孫う移れ。越来の石橋。経を  
かゝ縁がせえてその。うれ跡吊人と足引の。谷もあふぬ山松火  
剣りて削り。中ぐ二本の傘都婆を造りて夜は紛まて彼処は赴れ  
これを建てまか。お母。偏目盲なる婦女子ひとり。お木と賣てゆるに  
あひぬ。候初まがらおひひけられ。まぶそのりの。うん。お同お彼ま  
権。夫其甲が女兒な。おは。近属父母うちつて。て身まうりお山  
おと。ころおひとり住ごも。憑むべに親族もあふ。は。かく。まも命を  
惜れりの。あて。柴と伐て。布を織て。且。お星。戴れて。里へ。出。夕。お  
と。月。お。負。て。山。お。あ。ま。う。は。そ。と。お。推。量。お。れ。と。う。ち。敷。く。物  
の。い。ひ。ま。ま。お。回。れ。ま。よ。く。故。妻。お。似。る。お。な。似。り。け。て。と。ま。お。お。の。悪。ひ  
あて。お。お。一。樹。の。蔭。お。宿。る。も。他。生。の。縁。と。て。捨。る。も。忍。び。と。我。身。と

昔見長月合...

隠をよほぐふと。にじめつるにしらて彼が家み身を倚侍。只  
りとなぐ妻と嘆び。良人と呼れて小半羊山見とりのひま  
誓をうつぐれ友もなぐ。鄰ちうぶの孤館の籬色よ生る單家  
も。あのがるおとどひの外原来の千歳を山賊の女兒あやあらん  
すらん。さらさら又嘆雲が察事卒めて松壽とありつる身を打  
はりし八郎按司の往方とあられた謀計めてありける歎。それあ  
ねう。とどろり。あはれ果れて手取又たさきぬからさぬおり人ども  
どひうつ山鳥の尾上照る月あつて胸の雲のそ霧やうは  
は亦彼檄をうちえし。くえてぬらび怪。この檄をいれるあろ  
某薪を推つる毎母太山樞を伐とりて九本の経木を削作。按司  
王女のおんるふ谷河ふ推るがは。大里の二字がくうらう。一人

田土と写せし人おもては。いよのなる友と娶る割符のあは  
このふの千歳をさら。ぬく隠してのひに彼いうゆしてこの経木  
懐中しうけん。とてもかくても愁み生をりてあて生れはを義次  
いり人ども仇となれ賊婦と契は結びて。いひさくともそのかひ  
は。國乱とんとさるえじめより。毛國辨の教は隨ひ大臣利勇が  
竈に媚て識者の為み歳を厭つて不忠と呼れ不義と呼ははれ  
とれ名も國の為ふ。さひうえつ。王女を赦ひ八郎按司お値遇して  
より計畧ややく成就して利勇を誅戮たれども天運い。さ循  
環せと亦嘆雲が幻術ふ。うち敗れて只ひとり生かひもなれは  
山樹も春としかれ。日の光やうまう。ゆがたか。はも大將軍は再  
會と。その飲びを速くとそれハ心お羞れるのみ。さ。かるとれあや

春光り長月合意... 一... 二...

人と死ぬ己かんと。といひもめくを。左も右も次足かたりつ。柱の  
 下も倚りけられ礎の柱を引はして。さうら頭を打碎んとさうらし  
 かば彼ぞかえよと為朝のいも遠く余ぞかえ小舜天丸紀平治左  
 右より拳ふ獲りの腕をひきさめて。やぐ槌を棄ひしうは松寿  
 といふ自と羞く更み改を返も擡と當下為朝を松壽を打  
 えて頓み嗟嘆。東風平按司が年束の忠信におりひらふか  
 今い少所送りよめじ。借りのみ被ぞおふ。これも亦嘘雲が幻術  
 のうとて正みして足下のころを蕩して為朝を撃せん。あは  
 ちうく彼千歳とまらんも妖婦海棠が類なれん。さればこそ  
 件の婦嚮よさうく。為朝が腰の刀にめかかけられつがさの刀ハ  
 源家の重宝鬼切時鳩は異なる。は為朝いゆる嘉應二年の秋

讃岐國へ赴いて新院の山陵に詣りけられ夜君をとりたせり  
 父のりり延尉為義兄なりける左衛門尉頼賢掃部少頼仲  
 加茂六郎為宗源七郎為成守源九郎為仲少母至るまで夢の  
 中も姿を現し世のなりゆくべし先景をうち相語ひ多の行は松く  
 風小驚れ覚れば枕方ふ一口の宝剣あり。これ足保元事ある  
 除自行れて上北面よりまれ近江國伊庭の庄美濃國青柳の庄  
 とともに賜りしうまれ鶉の丸の御剣あり。傳聞この剣ハ白河院  
 神泉苑よけきなりて御遊の序お持はけりしして御覽せられ  
 殊に逸物とせしに鶉が二三尺むりなれりのを被たあげつと  
 おとと次衆皆怪しとせり。行り四五度よあびて後銜てあぐれ。

をこるる金西復輪の太刀なりけり近臣より奇異の事なりと  
まうりは上皇もいと不思議に思食かすは天劍なりと  
かぐて霧の丸と名はけて山秘を移りけりかぐて件の霧の丸は  
鳥羽院に傳りしを亦新院へまかすせよまうり新院竟ふり  
父よとふしたまひし一恩賜の宝劍爰の中ふも父為我が白糸  
威の鎧の上ふ佩りけりかぐとえし實は嗚呼奇なるかなと嘆  
賞して技は王散る秋の霜消ゆし後も子にあり親の形見の衣  
かこさる人ありまびこの年ま腰に離れとてなれば往は風波の  
難は係りて松の反覆らんとせしとれふを争く帆綱を切らせし  
又坂婦海棠と只一刀のみ破らみせしも鳴袋をて火を避るれば  
この劍の威徳とあり人ば身ふもかえがこれ物ありあれと且く足下

これを貸すべし。はしや千歳ハ喋雲う。幻術のるれとて海ありと  
禍獸海棠と等しくともこの靈劍を抜かだして切らむなど  
切れざらん。を争く千歳が首を刎く。さしに悪ね忠心事。あはして  
と説諭し。人をやがね良將の理非明断に面みありと王女  
舞天丸紀平治も只顧感嘆あがりけり。そが中に陶松壽を感  
涙坐し拭ひぬる罪の疑しれを誅せと刺する宝劍成。あはし  
ありとも貸すか恩恵の固み身にあり恥を雪ぐも今宵ふあり  
松壽がなるあ悪魔降伏あり飲しと礼儀正しく受とれ劍成  
左手ふかれこそ今もあれ千歳がゆりハ腸背きくひなく破  
ゆせくまは君小冠とれ坂原ありはあれあれべき限り  
て。ひとりも脱しゆじと我次入て勇い外面に物音とるる



其や西の人。氣多し。あな。穽とれ。吾們の。其の。事と討る。あ  
 便なう。おべし。とく。かかれよ。と。いへ。え。い。つ。ね。き。か。れ。山。吹。の。門。の  
 かり。水。影。も。と。び。め。と。乃。輕。へ。す。の。舞。天。丸。と。王。女。紀。平。治。の。天。曆。の  
 その。身。も。ま。ぐ。て。あ。が。や。う。舟。遊。屏。風。成。り。は。て。親。子。主。後。り。あ。ご。も。に  
 舊。の。処。へ。歸。ひ。つ。待。じ。り。ん。ハ。山。ふ。う。と。離。鹿。の。角。れ。東。の。間。も。千。代。と  
 千。歳。か。ぬ。り。ま。る。か。今。う。く。と。と。う。り。に。關。窺。て。こ。も。望。し。れ。

椿説弓張月 殘篇卷之二 畢

しん

さき月あを

あふ

